

心温まる 15の エピソード



30th Anniversary
SEIKAEN

社会福祉法人 三幸福社会 清華苑で働く職員のちょっといい話

はじめに

昨年、三幸福社会は設立30周年の節目を迎えました。この節目に当たって、法人内職員に心温まるエピソードを募集しました。世間では介護の仕事は重労働で報われることが少ないという評判が多く、求職してくれる人が少ない現状がありますが、実際にはそんなことはなく、介護の仕事に真剣に取り組めばいろいろと報われることも多いということを多くの人に伝え、職員全体でもその体験を共有することが大切であると考えて企画しました。介護に関連する仕事に携わる中で体験した実話をエッセイ、詩、短歌等にして提出してもらいました。

応募総数は実に271件に上りました。その後、審査員による選考でノミネート作品を15本に絞り、法人職員のほとんどが集まる忘年会で15作品を公開してグランプリ1本と準グランプリ2本等を投票で決めて理事長推薦枠を含めて表彰されました。忘年会での投票は来賓の方を含めて行われ非常に盛り上がりしました。法人内で体験談に共感することが多くあったためだと思います。この15作品を集めて公開します。

社会福祉法人 三幸福社会
総施設長 池田昌弘

平成29年12月1日発行

心温まる 15の エピソード

NO1	清華苑の桜・・・・・・・・・・	3
NO2	101歳のYさん・・・・・・・・	4
NO3	3年目のLetter・・・・・・・・	5
NO4	Chocolate・・・・・・・・・・	6
NO5	復帰・・・・・・・・・・	7
NO6	私はアクター・・・・・・・・	8
NO7	あきらめない・・・・・・・・	9
NO8	ここで仕事・・・・・・・・	10
NO9	介護川柳・・・・・・・・・・	11
NO10	七夕の願い・・・・・・・・	12
NO11	笑顔に勝る葉なし・・・・・・・・	13
NO12	人生の最後に・・・・・・・・	14
NO13	居心地のいい場所・・・・・・・・	15
NO14	妊婦にも優しい職場・・・・・・・・	16
NO15	大学受験！？・・・・・・・・	17



NO1 清華苑の桜

特別養護老人ホーム 清華苑
楠本由紀子

私が入職して2～3年目の春だったと思います。

ケース担当のうちの一人のご利用者Sさんが3月頃から体調を崩されていました。一時は意識も朦朧とされ、もしかしたら今日、明日の命かもしれないとまで言われ、大変危険な状態でした。幸い大事には至らず、順調に回復され、桜の季節を迎える事が出来ました。
Sさんは桜がとても好きな方でした。以前おられた病院にも桜の木があったそうですが、「清華苑の桜が一番綺麗。今まで見てきた桜の中でも3本の指には入るわ。」とおっしゃられていました。
ホールから桜を見ると、「今年も綺麗に咲いたね。」と大変喜んでおられました。
特養3階のホールからも桜の様子はよく見えますが、一番よく見えるのはやはり2階ホールからの眺めでした。「その方にもっと近くで桜を見せてあげたい」そう思っていました、病み上がりで、車椅子に10分程座るのがやっとという状態のSさんからすれば、いくら好きな桜を見に行くとはいいえ、2階まで行くのは負担になるのではないかと、その上、2人介助で移乗介助を行っているSさんを忙しい業務の中で、先輩職員と一緒に起こして欲しいと言って良いものだろうか、等と色々考えていました。

今となっては深く考えすぎだと思うのですが、その頃の私は、人見知りで先輩職員への遠慮もあり、自分の意見を前に出して言う事はなかなか出来ずにいました。そうして胸の中で思うだけで、しばらく過ぎていたのですが、ある日、先輩職員と業務が一緒になった時にSさんの話題になりました。
その時、本当に何気なく「Sさん、桜が好きで、今年も桜が見れて嬉しいってすごく喜んでたんですよ。もっと近くで見せてあげたいんですけどね。」と私が言うと、先輩職員は「じゃあ見せてあげよう！2階やったらよく見えるし、絶対Sさん喜ぶよ！」と教えてくださいました。私が「でもSさんそんな長い事起きとけないですし、移乗介助大変じゃないですか」と言うと先輩職員の方は「そんな大丈夫！手伝うよ」と言い切ってくださいました。先輩職員が一緒になって動いてくださり、Sさんを2階ホールまでお連れすると、Sさんは満開の桜を「綺麗やわ。ホンマに綺麗。」とうっとりとした表情で眺めておられました。
そして、私が心配していた事なんて何でもないんだと証明するかのように、Sさんは普段よりもずっと長い時間、車椅子に座り、桜を眺めておられました。「連れてきてくれてありがとう。こんなに近くで桜が見れて嬉しかったわ。」Sさんはとても穏やかな笑顔でそう言ってくださいました。その後、Sさんの体調は安定し、以前とお変わりなく生活できるようになりました。
しかし、数ヶ月後に体調が急変され、そのまま息を引き取られました。亡くなる直前まで普段とお変わりなく過ごされていた為、知らせを聞いた時は、信じられない気持ちでいっぱいでした。

毎年、清華苑の桜を見ると、Sさんの事を思い出します。その時、思い浮かぶのは桜を嬉しそうに眺めておられた、あの時の笑顔なのです。あの年の桜がSさんにとっての最期の桜となってしまいましたが、一緒に見に行けて良かったなあ、と今でも思います。もしあのまま一人で考え込み、行動に移せていなかったら、きっと一生後悔していたと思います。
あの時、先輩職員が自然と後押ししてくださった事がきっかけで、私は少しずつ周りに自分の意見を話せるようになりました。先輩職員の方からするとそんなつもりはなかったかもしれませんが、一人で仕事しているのではないのだと改めて感じ、ここの職員さんはちゃんと自分の話を聞いてくれるから、自分の考えを言っても良いんだという自信につながりました。
私が今でも仕事を続けていれるのは、あの日の出来事があったからだと思います。あの時の先輩職員の方には感謝の気持ちでいっぱいです。

NO2 101歳のYさん

特別養護老人ホーム 清華苑
瀬戸口有希

この清華苑で多くの方々と出会う事が出来ました。
その中で勤務して初めて任されたケース担当のYさんについてお話ししたいと思います。

Yさんは、101歳という高齢な為、普段は、寝て過ごされる事が多い方でしたが、起きておられる時に訪室すると気さくにお話しをしてくださる方でした。
Yさんは、会いに行くとき必ず「はよおとうちゃんとか行きたい」「はよ会いに来いよ」とおっしゃられ旦那さまの話を嬉しそうにされていました。
他にも「私怖そうに見られるけど根は優しいねん」と笑顔で話されるそんなYさんが大好きになり、出勤すると会いに行くのが楽しみでした。楽しいことが大好き。旦那様が大好き。子どもが大好きでした。
しかし、子どもには恵まれず、近所の子どもたちを自分の子のように可愛がり、育てたそうです。よく面会に来られた方もその一人とおっしゃられていました。いろんな話をしました。そして、Yさんは私に言いました。
「私は楽しいことが好きやから笑って見送ってなあ…」
その言葉を聴いたときから、胸に留め覚悟していました。
状態が悪く、話もほとんどされなくなったある日、居室から何やらブツブツつぶやく声が聴こえてきました。
Yさんでした。今までが嘘だったように「よーさん会いに来てくれたからあんたに紹介しようと思ったんや！」「どこ行ってしもたんやろ」亡くなったはずの妹さんや知り合いの方々が来られたと言われました。話された後、急に「抱いて」とおっしゃり両手を高く上げられたので、私はYさんを抱きしめました。

Yさんの訃報(ふほう)を聞いたのは、それから間もなくの事でした。
たまたま非番だった私は、無我夢中でYさんの元へ駆け付けました。その時のお顔は、とても穏やかで微笑んでおられました。
不思議と涙は出てきませんでした。ああ、大好きな旦那様の所へお迎えに来られた大切な方々の所へ旅立たれたのだと思いました。
私もYさんのように亡くなる時は笑顔で見送って欲しい笑顔で生を全うできる人生を送れたらと思いました。
人は、2度死ぬと聴きました。
1度目は、肉体が減んだ時。
2度目は、その人のことを知る人が誰もいなくなった時。
今も、私の中でYさんは生き続けておられます。



N03 3年目のLetter

特別養護老人ホーム 清華苑
宮良もも子

お母さんへ

3年前、私はお母さんの反対を押し切り清華苑へ就職したよね。

始めは誰も知らない地での生活に寂しさと不安な日々で、お母さんに泣いて電話した事もありましたね。
あの時は心配をかけてごめんね。

あっという間に時が過ぎて4年目を迎えました。

仕事の厳しさ、楽しさを教えてくれる上司、「これ食べて」と母のように、体のこと気遣ってくれる先輩、何かあればすぐに集ってくれる同期たちに囲まれて仕事をしています。

清華苑の人たちの優しさに何度も救われました。

私はここに来て良かったと心の底から思っています。

あの時、「最後は自分で決めなさい」と背中を押してくれてありがとう。

大切な大切な仲間ができています



N04 Chocolate

グループホーム 清華苑ポートピア
中村詠里

私が介護に携わってから、もう15年になります。

当時は、ホームヘルパー2級の講習が全盛期で、どこでも養成講座が開かれ受講するのに待たなければいけないぐらい人気が高まっていました。

私も、ホームヘルパーの資格を取得し意気揚々と養力センターにパートとして勤めることになりました。

当時は、年配の職員さん達が多く（私とあまり変わらないのですが）毎日厳しく指導され次々と一緒に入ったパート職員が辞めていくなか、「こんなしんどい仕事、辞めようかな」「思い描いていた介護と全然違う」などと、私も思うようになっていました。

そんな気持ちを持ちながら仕事をしている中で、M様という女性のご利用者の方とだんだんお話をするようになりました。M様は、とても色白で目がとても大きく小柄な方でまるでフランス人形の様な素敵なお顔でした。しかし、性格はとてもわがままな方で少しでも気に入らないと、厳しく文句を言われたり、大声で叫ばれたり、まるで無邪気な子供の様なところがありました。私が、目薬をさすと「下手くそ」「目薬もでけへんの」と、大声を出されたり、入浴介助すると「下手くそ」「ちゃんと洗えないのか」など、ごとごと怒られていました。

何か月かたつと、M様は私の事を覚えてくださるようになり、お話が出来る様になっていました。「目葉は、上手にさせる様になったけど拭く時は目元から丁寧に」と、少し笑顔で言うてくださる様になってきました。冗談を言い合って笑ったり、時には怒られる事もありましたがM様が段々と介護の仕方を教えて下さる事で、介護されるご利用者の方の気持ちや段々わかることが出来るようになってきました。

「あんたも、だいぶん色々出来る様になってきたな」と、クスクス笑って枕の下から銀紙に包んだ小さなチョコレートを一粒私に下さいました。「お食べ、内緒やで」と、言ってご自身もチョコレートを一粒口にされて、「ああ美味しいわ」と、本当に美味しそうに召し上がられていたので、勤務中でしたが私も、頂きました。「ほんまに、食べよった」と、目を丸くして笑っている姿に、対応に難しいM様と馴染みの関係になれた事が、本当に嬉しかったです。1年ぐらいい経ったころだったかM様が体調を崩されて、終末期をお迎えになられる頃に「あんた、やっぱりまだまだや」と、少し皮肉まじりに声を掛けてくださり、細く痩せた手からまた紙に包まれた小さな一粒のチョコレートを下さり「ありがとう。お食べ」と、いつものように命令口調で笑いながら下さいました。

これが、最後のチョコレートとなりました。

M様の弟様のはからいで、お葬儀に参列する事が出来ました。小さなお身体になられていらっしゃいましたがとても綺麗で、私がお顔を見ると笑ったような気がしました。

あの頃は、介護の仕事を始めて理想と現実との違いにすごく悩んでいました。でもM様の「ありがとう」が、悩みを解決してくださいました。又、M様だけでなく他のご利用者の方々との色々な思い出が、今の自分を育てて下さったと思っています。時々、色々なご利用者の方を思い出すことがあります。今でも笑える出来事がいっぱいあります。

私も歳を取ったなあと思う今日この頃ですが、定年まで後数年ですがこの清華苑で頑張って行こうと思っています。

NO5 復帰

小規模多機能型居宅介護 大久保苑
濱谷明子

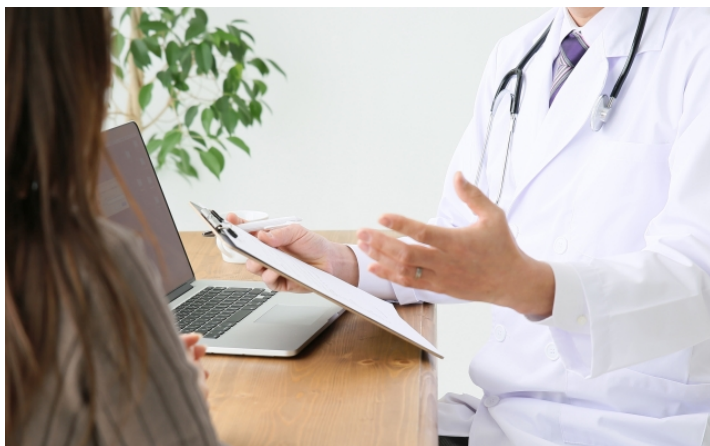
訪問介護から小規模多機能 大久保苑に入社して4年半。
その間、手首の骨折、乳がん治療のために1年2ヶ月程、休職しました。

手首の骨折では2ヶ月後に復帰、重い介助の時は、ナースさん始め、他職員も常に気遣いフォローして頂きました。復帰後胸のしこりに気付きながらも受診を躊躇い、一ヶ月すぎて乳腺科を受診。手術のできる病院で医療センターへの紹介、そこでのいろいろな検査を受け悪性度の高い乳がんであると宣告されました。手術の承諾を書くまでに、セカンドオピニオンを受けたいと神戸の病院を紹介していただきました。

癌の所見は同じもので、手術の方法等詳しく説明を聞きこの病院での治療を受けたいと希望しました。紹介していただいた医療センターに再度お願いして神戸の病院の初診の予約、紹介状を書いていただきました。私の癌にあった治療を決めるために、再度1からの検査を受け、抗がん剤投与6ヶ月、手術、放射線治療と1年休職しました。検査の間は、勤務しながら休暇を利用していましたが、抗がん剤治療に入ってからどんな体調変化が出てくるかわからなかったのも、休職しました。

休職中、職場の人から励ましの言葉や、暖かいメールを何度かいただき、復帰を待ってくださっていました。1年のブランクで忘れていた業務や、ミスで周りに迷惑をかけながらも、フォローしていただきました。一日中ほぼ立ちっぱなしのこの仕事、「椅子に座るとき～」と声をかけていただいて気遣いしてくれる職場です。

利用者さんには排泄介助の時、「こんなことまでしてもらって、すまん～」と、また笑顔で「ありがとう」と感謝される職場で、介護を受けられる年齢になり、娘や息子の年齢に近い人や、それ以上に若い職員に支えてもらいながら、利用者の立場により近くなって、他利用者や職員から嫌がられない可愛い高齢者に成れればと思っています。



NO6 私はアクター

老人保健施設 清華苑養力センター
大中由宣

グループホーム清華苑で勤務していた時のことです。

Aさんは加齢による認知症に加え、軽度の知的障害のあるご利用者でした。Aさんは短期記憶障害が顕著で、数分に1度「ここはどこですか。私はここにいてもいいのですか。」「〇〇（亡くなったご主人）はどうして死んでしまったんですか。」といつも不安そうに、繰り返し職員に問いかけました。余暇活動として塗り絵や書き物をしている時、職員と一緒に調理をしている時などは不安な気持ちを忘れ、作業に集中されることから日常的に筆記練習を行って頂くことを思いつきました。専用のノートを作り、筆記練習をしているとその間は不安な気持ちがよぎることはなくなるようです。私が夜勤をしていると居室から筆記練習ノートを持って詰め所に尋ねてきました。「出来ました。」とノートを見せてくれるのですが、筆記練習を促した覚えはありません。なんだろうと思い、ノートをみると「ををなかさん やさしいから すきです」と書いてくれていました。

感謝の気持ちを文字にして伝えて下さった、純粋なAさんの気持ちを本当に嬉しく思いました。認知症のご利用者の繰り返される訴え。仕事の手を止め、話を聞くことに苛立ちを感じる事があるかもしれません。しかし、認知症により短期記憶を喪失しているご利用者からすると不安な思いは事実であり、繰り返される訴えは初めて尋ねたことなのです。

日常的に認知症者と関わる介護員は上手なアクターにならないといけません。初めて聞いたように受け答えし、安心感を与えることで周辺症状は抑えられます。これからもご利用者に求められる「私」を上手に演じていきたいと思います。



N07 あきらめない

グループホーム 清華苑
八木尾洋祐

「もう歳だから…」「楽に暮らせてあげたい」。
介護施設で働いているとそういった声を耳にすることがある。
今からのエピソードは私にとって大きく価値観を変える経験となった。

9年前、私は特別養護老人ホームで介護員として働いていた。
100人のご利用者に対して介護、介護の日々に追われていた。90歳、100歳と高齢のご利用者が暮らし
ており、いかに楽に過ごしていただけるか、いかに安心していただけるかを考え介護をしていた。

ある日、Mさん（女性、93歳）が入所された。車椅子を利用されており、指先から腕・足はかなり拘縮しており、全介助であった。その方を見た瞬間、「なんとかしたい」と、今までにない感情が生まれた。毎日毎日、出勤時はその方となるべく会話し、なるべく関わり、その結果「絆」をつくることができた。「Mさん、ご自分の力でご飯食べたり、ご自分の力で動いたりしたいですか」と聞くと、「食べたい」「動きたい」とおっしゃった。私はその方の拘縮をなんとかしたいと思い、「毎日、グーになっている手を開いて下さいね」と軽い気持ちで言った。翌日、その方はグーになっている右手を左手で広げていた。その次日もその次の日も。誰も見ていないところでも。時にはテーブルの上で伸ばしていた。周りの職員には「Mさん、こんなしてるんやけど、なんか知ってる？」といわれた。私が出勤していないときでも、Mさんは一人で頑張っていたことを知った。その姿を見て私は涙が出そうになった。何ヶ月か過ぎた頃、「〇〇さん、見て、こんだけ広がるようになったんやで」「毎日毎日言われたようにしとんやで」と、満面の笑みで言って下さった。ある日、スプーンを手渡ししてみると、ご自分でスプーンを持って召し上がる事ができていた。その感動を今でもわすれることはない。その後も自分で出来る事を増やそうと、車椅子の自操を毎日一緒に練習し、ゆっくりではあるが出来るようになった。どんどんできることを増やしていき“全介助のMさん”ではなくなった。

それから私は人事異動でその方と離れることになったが、誕生日には出来る限り会いに行くようにしている。今年で103歳、元気に過ごしている。今はグループホームでケアマネージャーとして働いているが、「もう歳だから」「楽に過ごしてほしい」と言ったことは、その経験から思ったことがない。いくつであっても、どんな状況であっても、自分らしく、自分の思いを実現できるように支えていきたいと思う。わすれてはいけない、人間いつまでも向上するということを。



N08 こころで仕事

ケアハウス 清華苑シルバーライフ
M.T

何もわからないまま福祉の世界に飛び込み、多くを吸収していこうと奮起していました。

そんな中、業務に慣れてきたころの事、1人の入居者様が転倒された場面に初めて遭遇しました。私はすぐ駆け寄り状況を確認。返答はあるが転倒したショックで意識がもうろうとしておられたので、他の職員が到着するまで声をかけ励まし続けました。その後無事居室まで戻られ、ホッとしたことがありました。

これは4年以上も前の出来事ですが今もその方が「あの時あなたが助けてくれたのよ。しっかり覚えて
いるからね。ありがとう。」と言ってくれます。

仕事とすれば当たり前の事なのですが、“不安になる気持ちをなんとかしてあげたい”と必死だった想いが伝わったようでとても嬉しく、「心」で仕事をしていけるようこれからも頑張っていきたいと思えた入居者様からのお言葉でした。



NO9 介護川柳

訪問介護 清華苑ホームヘルプステーション
間処浩美

「お父さん どこも行ったら あかんで」と 握る妻の手 夫の笑顔



「まかせとき」 その一言で 和らいだ あの人の顔 今思い出す



NO10 七夕の願い

特別養護老人ホーム 清華苑
徳田芽久美

私が清華苑に入職するきっかけとなったのは、祖父母の影響が大きかったからです。

仕事をしていて本当に意味がある仕事をしているんだと感じたのは、自分の身内が実際に介護となった時「介護」という物がどういう事なのか分からない家族にとって私はとても頼もしい存在だと言われた事でした。

縁があって自分の身内母親の祖母を自分が働いている特養へお願いする事となった時は本当にありがたい気持ちと複雑な気持ちが入り混じっていました。職場の人には自分の身内だという事は最初の頃は伏せてもらっていました。なぜかと言うと自分の身内だという事で周りが気を使いとてもやりにくいのではないかと考えたからです。実際は、そんな心配をする必要もなく、人当たりが良く元気な祖母は瞬く間に職場のスタッフの人気者になりました。

祖母は人のお世話をしたり、冗談を言って人を笑わせたりするのが好きで、職場のスタッフの子が顔色が悪いのを見つけると他の職員を捕まえて「この子、顔色悪いからあんた掃除変わったって」といったり、私がまだ独身なのを気にして職場の結婚している男性職員を捕まえて「あんた、この子どないや」と言ったりと毎日が笑いの絶えない日でした。

仕事に行けば祖母が笑顔で「おはよう」といってくれる。帰りは私が見えなくなるまで「気をつけて帰りよ」と手を振って見送ってくれる。そんな人がいるという幸せを職場という場所で贅沢ですがかみしめていました。

ですが、元気だった祖母もターミナルを迎える事となり、正直私は心の整理ができませんでした。最後を見送るという事がどんなに辛い事か、今まで近くにいた人がいなくなってしまうという悲しみ。静養室で祖母に最後の食事をあげながら「ありがとう」とか細い声で言われた時は特養で一緒に過ごした思い出があふれ出て、涙が流れました。ちょうど亡くなる前は七夕があったので、願い事が聞けるかどうか分かりませんでしたが、祖母に願い事の確認をしました。すると、小さな声で「皆が幸せになりますように」でした。

これは、今まで暖かく祖母をサポートしてくれた職場の皆に感謝を述べていたのだと思います。身内を最後まで介護し見送るという貴重な時間を過ごす事ができたのは、特養の全スタッフの協力があったと今でも感謝しています。祖母も幸せだったと思います。ありがとうございました。



NO11 笑顔に勝る薬なし

通所介護 清華苑デイサービスセンター
神田美由紀

「いつも元気そうやね」と言われ、健康第一の私でしたが、帯状疱疹という病にかかりお産以外の初めての緊急入院となりました。

点滴が何本も続き、疱疹には刺すような鋭い痛みもある為、痛みに耐えられず眠剤で眠りにつく夜、ふとデイの事を思い出しました。『辛い事は長いことあらへん。ほんのいつときや。90年も生きとったら思い出すこともないわ』と、そう話されていたのは、デイ利用者だったKさんでした。

Kさんは、リウマチの為、両手首が内側に曲がっていましたが、しっかりと自助具を持ち、自分で食事をされている方でした。小柄で枯れ枝の様にやせ細った手足でしたが、瞳がとてもきれいでその目を見つめながらKさんの昔話を聞くのが大好きでした。Kさんは、夏でも冬でも『ぜんざい食べたいわ』とよく話しておられましたが、歯が1本も無く、嚥下状態も悪かった為、食べられる事はありませんでした。そして、Kさんがこの世を去る少し前『あの世に行ってお父さんと一緒にぜんざい食べるわ。だからこの世には帰らへんで。あの世も楽しみや。』と話され、その事をご家族に伝えると、その夜おしるこを用意して下さい、とても喜んで召し上がられたそうです。そんなKさんが残して下さいた言葉。『辛いことや痛いことなんてほんのいつときや。しらんぷりして笑ったとき。楽しいことはいっぱいあるで。』と。

そして、私の体から痛みが少しうすれた時、院室の隣から聞こえる声は、デイでよく聞く「な〜おかゆにして〜」「はよ帰らせて〜」と高齢者の患者の声でした。そんな時思わずデイ利用者の誰かさんを思い出して笑っている自分に気が付きました。

辛くて痛くて苦しい思いを沢山したからこそ、いつか笑って話せることがあるんだと改めて感じました。「早く良くなって一緒に頑張ろう！」といつも励ましてくれるスタッフの皆がいる笑い声の絶えないデイサービスに1日でも早く帰り『楽しみ』を沢山つくりたいと思います。

『病室で 隣の声聞き デイ思う 笑いに勝る薬なし』



NO12 人生の最後に

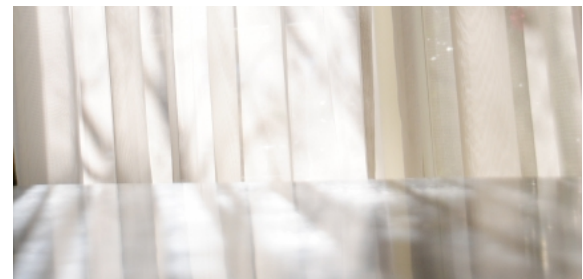
老人保健施設 清華苑養力センター
松田祐樹

それは、平成20年12月1日月曜日の早朝7時前の事だった。
私は、この時の事を鮮明に覚えている。いや、忘れられないというほうが正確かもしれない。

その日、私は早出で出勤しいつもと変わらず情報収集を行った後、先輩職員と共に朝食の為、東棟から離床介助を行いに行った。いつものようにA氏から起きていただく、「おはようございます、朝ごはんはいきましょう」と声掛けを行った。声掛けをした際、A氏は開眼、開口していた。A氏は反応されない。私は「あれ？もう起きとるんかな？聞こえなかったんかな？」と思ったが、表情や様子がいつもと違うことにすぐに気が付いた。
普段のA氏は声掛けに穏やかに「はい！」「なんや！？」と怒気を含んだ声で言われることが多かった。再度私は、A氏に声掛けを行ったが、やはり返事は返ってこなかった。私は心配になり、A氏の口元に耳をかざしてみたが呼吸をしていなかった。

私はすぐに看護師にA氏が呼吸をしていないことを報告した。看護師が確認したところ、A氏はすでに心肺停止状態であった。私と先輩職員の2人は、看護師の指導の下、すぐに心臓マッサージを開始した。季節は冬だというのに私は額に汗してもしもしカメよ、カメさんよの要領で無我夢中で心臓マッサージを行った。心臓マッサージ中、私はA氏に「Aさん、起きてよ！ご飯行こう！いつまで寝とるんよ！早よ起きよう！」や「もうすぐ、大みそかやで！お正月やで！みんなで年越そうよ！お正月迎えようよ！」と必死に声を掛け続けた。先輩職員も同様の声を掛け、A氏の肩を揺らすなどし、A氏の反応を待った。
状況から見て当時、未熟であった私でもA氏が息を吹き返すことが困難であることは理解できた。だが、もしかしたらA氏が息を吹き返し「痛いやろ！何するんや！」と言うような気がしていた。わずかな希望を持ち、諦めずに懸命に心臓マッサージを続けた。
しかし、A氏は私たちに二度と声を発する事は無かった。高齢者になると、誰しもが多かれ少なかれ、病気を持っている事は理解していたが、昨日まで変わらない様子であった人がという思いが私の胸に去来した。
そして、私は涙が出てきた。私の隣で普段から笑顔の絶えなかった先輩職員も涙を流していた。「最期が俺でごめん」と言い泣いていた。

私は、今でも時折、この事を思い出す時がある。あの時のA氏の表情が鮮明に蘇ってくる。もしかすると、人生の最期に私たちを選んでくれたのではないかと考えた時、私たちは、少しでもA氏の為に役に立つ事ができたのではないかと思う。



NO13 居心地のいい場所

老人保健施設 清華苑養力センター
青木友和

事務所で仕事をしているとたまに玄関ロビーからご利用者が家族・職員との話し声が聞こえる。

リハビリの訓練に励んでいるご利用者と職員が寄り添ってたわいもない話で花が咲く。

ご利用者が家族・職員と昔話や童謡と一緒に歌っている姿はとてもほほえましく、仕事が忙しく自分に余裕がない時ほど聞こえてくる。

自分にとってご利用者と職員の会話を聞いているだけで直接ご利用者と関わらない自分も関わっているかのように居心地いい気分になり、思いどおりに出来ないことのイライラが穏やかになり、リラックスモードに変わって、再び頑張るぞという気持ちにしてくれます。

この環境が居心地のいい場所になっています。



NO14 妊婦にも優しい職場

通所リハビリテーション 清華苑すいすい
飯貝佳奈

このたび、3人目の赤ちゃんを授かることになりました。

今回の妊娠は、上の子の時とは違い仕事を続けながらお腹の中で元気に育てたいと妊娠する前から決まっていた。上司に相談するととても喜んで下さり、出来る限りサポートするから元氣な赤ちゃん産もう！と応援してくれたことを今でもしっかり覚えています。

お腹が大きくなるにつれて、仕事で出来ないことがどんどん増えて周りに助けてもらってばかりの状況に悲しくなって妊娠後期になる前に辞めてしまおうと何度も思いました。精神的にすごく弱くて仕事場で何度も弱音を吐いたり泣いてしまったこともありましたが、そのたびに周りのパートさんや正社員の方に励ましてもらいました。たかがパートの私をととても大事にしてくれて、産まれるギリギリまで出来るような仕事内容を考えてくれて仕事場に私の居場所を残して置いてくれました。

前の部署でもそうでしたが 清華苑では正社員だから大切、パートだから雑に扱うとゆうことはなく、働いている一人一人を大切にしています。一旦仕事を離れてもまた戻ってきて働きたいと思えるような職場です！信頼できる人間関係があって家以外の自分の居場所をもてるととても温かみのある職場です！今回の妊娠を通してすごく感じました。

無事に出産してまた同じ職場に戻ってきたいと思います！



NO15 大学受験！？

認知症対応型通所介護 清華苑らんらん
下野美登里

表情も乏しく一点を見据え、険しい顔つきの K 様（58 歳）との出逢いは A 精神病院。
40 歳代でうつ病発症。その後、統合失調症で入退院を繰り返す内に、認知症状が見られ内服のコントロールにより退院の運びとなり、らんらんとのご縁をいただいた。
高齢者のディサービスで満足していただけるのか？と若干の不安を抱きながらのスタート。

K 様の出来ること、出来そうなこと、またやってみたいことを一緒に考えながら取り組んだ。苑内の 4 つのテーブルをくっつけての卓球三昧。「僕はらんらんに来て、カラオケをするようになって病気が治ったんです！さあ～今日もカラオケをしましょう」と、音程が外れてもお構いなしのカラオケの日々。一冊の大学ノートに名前と住所を書くことから始め、翌年には職員と交換日記をするまでに・・・。
「何！おっさん！何いうとんねん！」とホールに響く怒鳴り声に、職員はハラハラ。ドキドキ。男性利用者同士のトラブル発生。正義感が強く純粋な K 様は、声を震わせながら「少しお話があります」「僕は納得がいきません」と事務所で話し合いをしたことも数回。
K 様にとって、コミュニケーションのとれる方が少ない「らんらん」で、もっと何か・・・？出来ること？を模索。「そうだ！パソコンだ！」思い立ったら行動へ・・・早速に、総施設長にお古のパソコンを探して頂き設置をお願いした。新しい「おもちゃ」の登場で、K 様がパソコンにのめり込んでいったのはいうまでもない。
私達が良かれと思っても、ご家族に迷惑とトラブルが発生してはいけな。そこは慎重に、慎重に進めては行きましたが、「パソコンが欲しい」「僕はパソコンがないと生きていけません」と、これまた、真っ直ぐな想い。多少のトラブルが発生しつつも、理解あるご家族からパソコンのプレゼント。

若い頃は、機械設計の仕事をされていたこともあり、パソコンで色々調べているうちに「もう一度勉強したい」「もう一度働きたい」という気持ちが芽生え、その一途な気持ちは「定時制の工業高校を受験したい」へ変わり「受験する！」に決まて行った。特別枠もあり、みごとに合格。「学校が休みのときはらんらんに来ます。」と、何の躊躇もない言葉に・・・私や職員は嬉しいやら困ったやら・・・涙を浮かべながら大笑い。
奥様からは「不安だらけですが、らんらんは卒業です」「本人の思うことをさせます。ありがとうございます」と K 様は定時制高校へ進学。正直なところ、私を初め誰もが体調を崩し辞めてしまうだろうと思ったに違いない。
しかし、K 様はもう高校 3 年生の二学期を迎えている。敬老祭と餅つき大会には、毎年欠かさず参加。「学校の入学パンフレットに僕が載っている」と 2 年続けてパンフレットも届きました。

先日は、「成績表を見せたい」と自信満々の成績表持参で来て下さった。とある日の電話では、「実は悩んでいるんです」と・・・。よくよく話を伺うと「大学受験したい」とのこと。ご家族はきっと「冷や冷やもの」だけど、そんなことはお構いなしに、K 様の夢はまだまだ膨らみ続けていることでしょう。そんな K 様の夢に、そっとエールを送り続けよう・・・



こころが「ほっとする」

安心が「ひろがる」

これからも地域の為に

